



おとがわ



ふお～ゆ～

校長室だより

第 28 号

R3.10.21

文責 中西 勉



後期委員会発足 ～活躍に期待～

本校には、代表、集会、緑化、美化、放送、体育、保健、図書、給食の九つの委員会があります。10月からの後期委員会発足に伴い、今週18日(月)に任命式を行いました。任命式の児童代表あいさつで、代表委員会委員長の兒嶋由妃乃さん(6年)は、「委員会活動に積極的に挑戦していきたい」と抱負を述べました。各委員会の今後の活躍に期待しています。



シリーズ「東京オリンピック」⑧ ～「全員野球」を貫いた金メダル～

シリーズ第8回は、「金メダル獲得」という悲願を成し遂げた野球の侍ジャパンについてです。

侍ジャパンに選ばれた24名は、それぞれがプロ野球の各球団の中心選手ばかりです。それだけに、稲葉篤紀監督は、この選手たちをいかにチームとしてまとめあげるかに心を砕いたことでしょう。選手の起用は、どうしてもその回数に差が出てしまいますが、稲葉監督は、どの選手に対しても、チームの一員としてなくてはならないという選手への熱い思いを述べています。その象徴的な場面が、8月2日の米国との準々決勝にありました。この試合は、中盤までに点を取り合い、日本が九回に6-6の同点として、タイブレークの延長十回に突入しました。無死一、二塁から始まる攻撃で、稲葉監督は、村上宗隆選手に変えて、栗原陵矢選手を代打で起用しました。栗原選手に課された任務は、ずばり「送りバント」です。栗原選手は、稲葉監督の思いを胸に打席に立ち、初球できっちりとバントを決めました。その後、1死二、三塁から甲斐拓也選手がサヨナラ打を放ち、日本は勝利を手に入れました。ヒーローとなった甲斐選手が脚光を浴びる中、稲葉監督は、お膳立てをした栗原選手に対し、「初出場でバントをよく決めてくれた。あそこで選手がグッと一つになった気がする」と、最高の賛辞を送っています。栗原選手の東京オリンピックでの出場機会は、この1打席、しかも1球だけでした。しかし、そのような選手に対しても、稲葉監督は感謝の念を忘れず、全員野球を貫いたのでした。

そんな稲葉監督の気持ちを選手たちも深く理解し、決勝後の表彰式では、菊池涼介選手が稲葉監督に近づき、自分の金メダルを監督の首にかけるといったシーンが見られました。菊池選手は、「監督、コーチにメダルがないということで、僕のものでいいのであれば、かけてあげたいという思いで写真を撮った」と語っています。それに対し、稲葉監督は「素晴らしい色で、重量感もあった。金メダルを取れたんだなと。選手には感謝の気持ちしかない」と込み上げる率直な思いを述べています。監督・コーチ・選手が一丸となって戦い、「全員野球」を貫いて手にした金メダルは、本当に価値がありますね。



明後日<23日(土)>は、いよいよ「男川分散運動会」です。担任と子供たちが心をつなげて、「全員」で大きな感動を創り上げるのを楽しみにしています。